



Title	序章 共同研究の背景・目標・意義・射程など
Author(s)	浜渦, 辰二
Citation	子育ての現象学. 2023, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91216
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

序章 共同研究の背景・目標・意義・射程など

浜渦 辰二

はじめに¹

筆者たちは、これまで北欧の現象学者との共同研究において、「人間の傷つきやすさと有限性」を主題に据え、誕生、老い、病い、死、障がい、痛み、性・ジェンダー、人種・差別といった具体的な問題を現象学的観点から検討してきた。その結果、こうした検討の妥当性を検証し、その応用可能性を吟味するために、統一的な主題を設定し、特定のフィールドで調査・分析する必要性がでてきた。そのため、本研究では北欧の現象学者との共通のフィールドとしてフィンランドの先進的な子育て支援施設ネウボラを定め、「子育て」についての現象学的な検討を行う。子育てに注目することで、親子関係、子の障がい、育児と老いの関係などを具体的に考察し、「人間の傷つきやすさ」の社会実装のあり方を検討することが可能となる。また、子育ての経験およびそれらと密接に関わる問題との連関を現象学的に解明し、少子化、子どもの虐待、超高齢社会といった現代社会の諸問題にも寄与することを目指す。

1. 本研究の背景と必要性

フッサールを祖とする哲学潮流である現象学は、国内外で広く研究されてきたが、その方向性としては、(1) 英米系の分析哲学や認知心理学・生態学的心理学との関連や接点を探る北米系の研究と、(2) 文献や草稿の読解に基づき、個々の現象学的哲学者の解釈を掘り下げるヨーロッパ大陸系の研究に二分される。そのなかで、北欧では、フッサールやメルロ＝ポンティの身体論やボーヴォワールのジェンダー論などを用いつつ、男性研究者を中心とした既存の研究では看過されてきた女性の身体的経験（月経、妊娠、出産）に着目する「フェミニズム現象学」の研究が盛んに行われてきた（S. Heinämaa, *Toward a Phenomenology of Sexual Difference*, 2003）。なかでも、福祉先進諸国の顕著な特色として、ジェンダーと病いや障がい、医療との関連性が深く研究されてきた（Zeller & Käll (eds.), *Feminist Phenomenology and Medicine*, 2015）。

筆者は、フェミニズム現象学のアプローチを取り入れつつ、2013～2016年基盤研究（B）「北欧の在宅・地域ケアに繋がる生活世界アプローチの思想的基盤の解明」、2016～2018年度基盤研究（B）「北欧現象学者との共同研究に基づく人間の傷つきやすさと有限性の現象学的研究」の研究助成を受け、長年にわたってフェミニズム現象学に従事する北欧の現象学者と共同研究を行ってきた。その際、北欧の現象学に特有の主題を「人間の傷つきやすさ（脆弱性 vulnerability）と有限性」に見定め、誕生、老い、病い、死、障がい、痛み、性・ジェンダー、人種・差別といった人間にとって避けがたい問題を、日本や北欧の文脈の比較等

¹ 本稿は、日本学術振興会の科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）の国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）への申請にあたって、2019年11月に執筆した交付申請書をもとに作成されたものであり、各研究分担者の所属・身分は当時のままにしている。

も交えて検討してきた。しかし、これまでは既存の研究論文や調査結果に基づいた研究を共同シンポジウム等で発表し議論することを主眼としていたため、そうした現象学的研究が実践的な場面でいかなる意義をもつかを検証しにくかった。そのため、日本と北欧の研究者たちが共通のフィールドで継続的に調査したうえで、現象学的な分析を行い、分析の有効性や応用可能性を検証する必要性が生じた。北欧の現象学者たちも、Irina Poleshchuk (European Humanities University, Lithuania) Erika Ruonakoski (University of Jyväskylä) とを中心に、現象学の研究成果を具体的な場面・施設で応用する可能性を探る実践的現象学センターを立ち上げ、国際的な共同研究の可能性を探っていた。そこで、「人間の傷つきやすさと有限性」のなかでもとりわけ「子育て」をテーマとし、特定の施設をフィールドとして、彼らと共に現象学的実践的可能性について検討するという計画が持ち上がった。

2. 子育ての現象学とフィンランド・ネウボラ

【なぜ「子育ての現象学」なのか？】

こうした背景のもと、本研究は、長年にわたって共同研究を行ってきた Sara Heinämaa のアドバイスを得ながら、Irina Poleshchuk と Erika Ruonakoski を共同研究者として、フィンランドの子育て支援施設ネウボラをフィールドにし、子育ての現象学的研究を試みる。

老いや死についての現象学はこれまで数多くの蓄積があるが、誕生や子育てについての現象学的研究は芽生え始めたばかりである(『思想』「特集:生殖/子ども」, 2019年5月号)。子育ての経験に注目することで、親ないし子どもに障がいがあるケース、高齢者の育児参加、高齢者介護と育児の重複の問題などが新たに浮かび上がり、「人間の傷つきやすさと有限性の現象学」の社会実装のあり方を総体的に検討することが可能となる。

また、子育てに関して、日本では親の心構えや「教育」については多くが語られているが、「公的な子育て」の理念や思想についてはあまり語られない。しかし、女性の社会進出により子育てが私的領域のものから公的領域へと大きく移行している今、その基本的思想の部分の重要性は増している。現象学的アプローチをとる本研究は、この「公的な子育ての哲学」の提案を含んでおり、今後の社会的議論の活性化に貢献しう。

【なぜネウボラをフィールドとするのか？】

ネウボラは、妊娠期から出産、子供の就学前までの間、母子とその家族を支援するために地方自治体が運営する先進的な施設で、医療や健康に関するだけでなく、子供の成長や子育て、家庭の問題など、妊婦を取り巻く様々な悩みを相談でき、妊娠・出産・子育ての切れ目のない支援を目指すもので、厚生労働省もモデルケースの一つとしている。フィンランド国内に約800箇所存在するが、本研究では、ヘルシンキとユヴェスキュラを中心とする。

これまで、ネウボラでの支援や施設の運営方法については、フィンランドや日本でも福祉政策や教育学をはじめとする様々な分野で研究が進められてきた(高橋睦子『ネウボラ—フィンランドの出産・子育て支援』, 2015; 横山美江・Hakulinen Tuovi 編『フィンランドのネウボラから学ぶ母子保健のメソッド』2018など)。しかし、ネウボラが子育て支援にとどまらず、いかなる価値観や家族観を形成しているか、そこでなされる妊婦やパートナーへの支援が当事者たちにとっていかなる意味をもつのかについては、フィンランド国内においてもそこまで研究が進められていない。本研究は、医療やケアの従事者とも連携して調査を進

めているフィンランドの現象学研究者たちの力も借りて、現地での継続的な調査を行うことで、ネウボラの支援やそこで育まれる人間関係によって、妊婦やパートナーの出産や子育てについてもつ見方がいかに支えられたり、変容させられたりするのかを考察する。

ネウボラは妊娠出産から子育て期の親子を、親子が置かれた社会状況や人間関係も考慮に入れながら支援しているため、子育てに関連して表面化する人間の傷つきやすさの実相を調査し、分析するために最適なフィールドである。また、ネウボラを中心とすることで、それと連携ないし関連する施設、例えば児童相談所や障がい者施設や高齢者介護施設についても子育てという観点から調査を行いやすくなる。このようにしてネウボラを中心とするフィンランドの施設における出産・障がい・老いを取り巻く支援体制がいかなる人間観に基づいてなされているか、とりわけ人間の傷つきやすさに対していかなる視点からアプローチしているかを考察することが可能となる。以上のような考察を行うためには応募者たちがフィンランドに長期間滞在して継続的に調査・分析する必要がある。

3. 本研究の意義と射程

現象学研究を実践的な場面に応用する試みには前例も存在する。例えば、日本ではとりわけ看護や障がい者支援の場面で、現象学的知見を生かした研究が進められてきた(西村ユミ『語りかける身体—看護ケアの現象学』, 2001. 村上靖彦『摘便とお花見—看護の語りの現象学』, 2013. 松葉祥一・西村ユミ編『現象学的看護研究』, 2014. 河野哲也『現象学的身体論と特別支援教育』, 2015.)。また、現象学的な観点から教育のあり方について研究する現象学的な教育学の蓄積も存在する(中田基昭『教育の現象学—授業を育む子どもたち』, 1996)。しかし、子育て支援に関して、とりわけ福祉先進国である北欧での子育て支援やケアの現場に入って、現象学的な観点から調査・分析がなされるのは初めての試みである。

福祉先進国の子育て施設とそれ以外の関連施設も含めて現地の研究者と共同で現象学的研究を深める本研究は、日本の現在の状況においてタイムリーであり重要な貢献が期待できる。現在の日本では、出産年齢が上がり子育てと親の介助が重複する状況が増えており、地域で子育てをする習慣が衰退して施設への依存度が高まっている。フィンランドの重層的な支援施設の仕組みはそれ自体で参考に値するが、現象学は人の経験を時空的に広がりある仕方で把握する方法であり、子育てだけでなく障がい者や高齢者の介護も含めた社会関係を総体的に描き、包括的な支援システムのビジョンを提示することが期待できる。

本研究の主たるフィールドをなすネウボラは、妊娠出産から子育て期の親子を「切れ目なく」連続的に支援する役割を担っているが、それは、妊娠から出産を経て子育てをする母と成長する子どもの支援には限られない。ネウボラはそれ以外にも、まず、避妊の相談や、予期せぬ妊娠に関する相談も担うのと同時に、新生児遺棄や子どもの虐待を予防したり発見したりする役割も担っている。日本では望まない妊娠をした場合や、急速に普及しつつある新型出生前診断で胎児の障がいが発見された場合に、時間をかけて相談する機関や体制の不足、また育児に追い詰められた親や、親からの虐待を相談できない子どもの問題が取り沙汰されているが、ネウボラの研究はそれらを解決する有効な手掛かりとなりうる。さらに、日本では、妊娠出産、育児に中心にかかわるのは母親であるという認識がいまだに根強く、注目されたり支援されたりするのも母子が中心であるが、ネウボラは父親や兄弟を含む家族全員を観察や支援の対象としており、母親と父親双方の賃金労働・育児、双方への共同参

画を促進する有力な手掛かりになると考えられる。

このように、本研究の関心は、妊娠出産・子育てと、障がいや虐待、男女共同参画等の問題が交錯するところに置かれており、これらを連続した問題として扱うことができる点に重要な意義がある。

4. 本研究の学術的背景、研究課題の核心をなす学術的「問い」

筆者は、フッサール現象学の研究を一貫して継続しながら（『可能性としてのフッサール現象学』,2018）、それと並行して、広義でのケアをめぐる問題に取り組んで来た（編著『北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす』,2018）。また、両者を繋ぐ、ケアの現象学・倫理学・臨床哲学を「人間の傷つきやすさと有限性の現象学的研究」というアイデアのもとに、医師や精神科医、医療・看護や介護の研究者や実践者とともに、対話と共同研究に取り組んできた。しかも、それを国内での共同研究にとどまらず、これまで、基盤研究（B）「北欧現象学者との共同研究に基づく人間の傷つきやすさと有限性の現象学的研究」（2016～2019 年度）の共同研究によって、特に北欧（スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、フィンランド）の現象学者たちとの共同研究に基づいて展開してきた。

そもそもフッサール現象学は、早い時期から精神病理学者のヤスパースやビンスヴァンガーの関心を引いていたように、病気や障がいをもった人がどのような世界に生きているのかを考察することに貢献できると考えられていた。フッサールは晩年において超越論的次元の探求は生活世界（私たちが生きている世界）から始めるべきことを強調するなかで、「正常と異常」の問題を考察し、「生老病死」あるいは「誕生と死、そして性の問題」に関心を寄せ、「私自身やがて死ぬだろう—かつて生まれて来て、大人になり、年老いてきたように。しかし、問題はこのことが何を意味するかだ」と述べ、それらを超越論的次元で考察する「現象学の限界問題」に言及して、〈人間の傷つきやすさ（弱さ、壊れやすさ）と有限性（始まりと終わりによって限られていること）〉がもつ意味の研究を大きな課題と考えていた。ただし、フッサール自身は、これらを課題としながらも、自ら具体的に展開することではなく、それらの課題は、ハイデガー、シュツツ、サルトル、メルロ＝ポンティ、レヴィナス等の現象学の継承者たちがそれぞれに引き受けていくことになった。

以上のような学術的背景のもと、本研究課題の核心をなす学術的「問い」は、親にとって子育てとはいかなる経験であるかというものだ。子育てとは、たんに子どもの養育・教育に限られず、子づくり、妊娠、出生前診断、出産準備といった出産の前段階から始まっている。また、両親と子どもの間に閉じたものでもなく、祖父母をはじめとした人間関係や医療施設や地域の保育・子育て支援施設、さらには両親の労働環境によっても左右されるものである。そして、子育てという経験においては、障がい者が子どもをつくるかどうかの選択や、新型出生前診断の受診などを通じた子どもが障がい児である可能性との対峙、生まれてきた子どもの障がいや病気への対応、育児への高齢者の参加、育児と高齢者の介護との重複といった形で障がいや病、老いといった人間の傷つきやすさが最も表面化しやすい場面の一つである。

子育てという経験を特定の局面や家庭といった空間に限定することなく、以上のような拡がりのなかで捉え、現象学的観点から、すなわち子育てをする親の視点から、それがどのように経験されているか、そしてネウボラにおける多方面からの支援によってそうした経

験がいかに変容されるかを調査・研究する点に、本研究の学術的価値が存する。

5. 本研究の目的および学術的独自性と創造性

本研究の目的は、現象学の方法を用いて、ネウボラの支援を経て形成・再形成される親の子育て経験を当事者の視点から解明することにある。子育ての場面では、しばしば子育てをする当事者の視点が見過ごされてきた。例えば、子育てについては、様々な養育論やマニュアルが流布しているが、子どもの成育や発達を客観的な視点から解説して子育てのポイントを親に教示するものが大半であり、子育てをする親のパースペクティブが十分に尊重されているとは言い難い。

ネウボラにおいては、出産前から親の経済的状況や労働環境、パートナー間の人間関係や周囲との人間関係について妊婦や父親となる男性との対話や相談が行なわれている。こうした対話を通じて、支援者が一方的に子育てについての知識を教えるのではなく、妊婦や男性パートナー自身が自分たちの置かれた環境に沿って自分たち自身の子育ての認識や知が育まれている。つまり、そこでは、それぞれの親に特殊な事情、特に親や子の障がいの有無、経済的状況や労働環境、周囲の人間関係といった傷つきやすさを孕んだ現実に沿って、各人にとって望ましい子育てのあり方を支援者と共に探求していくという「探究の共同体」が形成されている。

現象学は、経験する当事者の視点から、経験を当人が位置づけられた経験のネットワークのなかで記述し、分析する手法である。そのため、人間の傷つきやすさを生物学的な観点や社会学的な観点からではなく、私たちが生きる生活世界という場面から、祖父母をはじめとする人間関係や様々な施設や労働環境との関連を含む経験のネットワークのなかで考察するのに最も適している。当事者が自分一人（一人称パースペクティブ）で研究するだけではなく、共に歩む人（二人称パースペクティブ）やさまざまな分野の研究者・専門家（三人称パースペクティブ）との対話のなかで「探求の共同体」を形成する試みも現象学の内部から生じている。このような現象学的方法を用いて、支援される当事者の視点から、ネウボラの子育て支援の真の意義に迫る点に本研究の独自性がある。

ネウボラは避妊の相談や予期せぬ妊娠に関する相談、新生児遺棄や子どもの虐待を予防したり発見したりする役割、父親の子育てへの参加を促す役割も担っているため、そうした支援を当事者視点から分析することで、子育てが周囲の人間関係や支援体制との関連のなかで、いかにして傷つきやすさに晒され、それを克服しうるかに光が当てられることになる。このような検討を通じて、応募者が理論的な側面から研究し続けてきた「人間の傷つきやすさの現象学」の社会実装のあり方を総体的に研究することが可能となる。

以上のような研究を通じて、ネウボラを一つのモデルとして、日本国内の子育て支援制度や施設のあり方を再考して提言する点に本研究の創造性がある。制度やシステムをたんに輸入するだけでは、異なる文化的・歴史的背景をもつ日本では様々な困難に出会うことが予想されるが、そうした制度やシステムを稼働させている人間観や価値観の理解が促進されるなら、北欧の制度や施設の良い点を日本に取り入れることも可能となるはずだ。

6. 本研究で何をどのように、どこまで明らかにしようとするのか

本研究では、北欧の現象学者らと共に、フィンランド（ヘルシンキとユヴェスキュラを中心に）のネウボラをフィールドとして継続的な調査を行い、現象学的な分析を進めるが、各人の役割と調査対象および研究目標は次の通りである。

筆者は、研究全体の統括と海外共同研究者や訪問先との連絡・調整のため、毎年2週間程度の渡航を計画している。これまで北欧の高齢者施設、ホスピス、インクルーシブ教育の学校の調査などの経験と老いの現象学的研究とに基づき、子育てが親子関係の問題だけではなく、祖父母との関係、きょうだいとの関係、社会との関係などとも結びついていることを視野に入れながら、研究全体のデザインに配慮する役割を担う。特に個別研究の課題として、フィンランドでは高齢者は育児にどのように参加し、あるいは排除されるか、また高齢者介護と育児がどのように両立されているのかに注目して調査・検討する。

池田は、子育ての現象学の理論的解明という役割を担う。具体的には、ネウボラの実践を調査研究フィールドとして「子育ての現象学的探究」をフィンランドの研究者と進める。子育てを、誕生前の妊娠・出産から開始するものと考え、様々な社会関係のなかで経験される営みとして現象学的に分析することが目標である。そのために、1年目と2年目にフィンランドにそれぞれ一週間ほど滞在し、ネウボラの施設の調査研究および議論にあてる。同時に、子育てについての従来の哲学的・理論的見解を調査し、経験に即した現象学的分析の立場から、既存の理論を現実への符号や現実からの乖離の点で吟味する。

中は、母子に集中した親子関係を理論的実践的両側面から再考するという役割を担う。2年目と3年目にフィンランドに一週間ほど滞在し、ネウボラでの調査により子どもとの関係における、妊娠出産を経験した母とその子の関係の生物学的側面に依拠した特権性あるいは義務を解きほぐし、「第一の親」としての子の関係は性別や血縁関係を越えて広がりうるし、現に広がっている側面があることを明らかにする。その際、望まない妊娠による中絶、出生前診断にかかわる親の葛藤、新生児遺棄、虐待、養子、里親、父親中心の子育てなど、妊娠出産・子育ての典型とはされていないかたち、あるいは負の側面にも重点をおいて解明する。

小手川はネウボラにおける「父子関係」の形成を理論的実践的両側面から解明するという役割を担う。1年目と3年目にフィンランドに二週間ほど滞在し、ネウボラにおける出産や子育てに男性パートナーがどのように係わり、どのような支援がなされているのか、またネウボラにおける支援によって男性たちの出産や子育てに対する係わりがどのように変容していくかを調査・分析する。このような調査・分析を通じて、男性たちの「父親」としての自己認知がどのように形づくられていくのか、また男性たちがたんなる生物学的な父親にとどまらず「父親」となるために、周囲のいかなる支援が必要かを現象学的な観点から考察する。

若手研究者である川崎は、北欧の若手研究者とのネットワークづくりとネウボラにおける子育てに関連する生命倫理学の理論的枠組みを批判的に検討する役割を担う。1年目にスウェーデンの現象学的生命倫理学を主導する研究者の属する研究機関（ストックホルム大学、セーデルトーン大学等）を訪問し、現地の若手研究者とのネットワークづくりを行う。2年目と3年目にフィンランドに二週間ほど滞在、ネウボラを訪問し、そこでの子育てが従来の生命倫理学で前提されてきた個人観や家族観に対していかなる見直しを要求するものであるか、現象学的な記述に基づいて考察する。また、障がいのある子どもとその親に対する支援についても調査し、関連する生命倫理学・障害学の議論を再考する糸口を探る。

7. 本国際共同研究における海外共同研究者の役割や研究内容

Irina Poleshchuk (Associate Professor at the European Humanities University, Lithuania) は、The Center for Practical Phenomenology (Finland)の議長として、ヴェルニスとヘルシンキを往復しながら活動しており、フィンランドの共同研究者の代表として、フィンランド側の活動のまとめ役を務める。本共同研究のなかでは、特に、母子関係および、病気や障がいをもった子または親の家族のなかでの子育ての問題に取り組む計画である。

Erika Ruonakoski (Docent at the Department of Social Sciences and Philosophy, University of Jyväskylä, Finland) は、ユヴェスキュラとヘルシンキを往復しながら活動しており、フィンランドでネウボラ訪問のコーディネーターを務め、連絡係のポストドクの研究員(後述)の監督も務める。本共同研究のなかでは、特に、コミュニケーションが取りにくい子の子育てにおける母子関係・父子関係・きょうだい関係・制度的支援との問題に取り組む計画である。

Sara Maria Johanna Heinämaa (Professor of Philosophy at the Department of Social Sciences and Philosophy, University of Jyväskylä; Director of the Research Community - Subjectivity, Historicity, Communitarity (SHC), Helsinki Collegium for Advanced Studies, University of Helsinki)は、これまで応募者および学内共同研究者と長く共同研究をしてきており、また上記二人のかつての指導教員でもある。「子育ての現象学 (Phenomenology of Child Care)」は国際的にも傑出した研究者が関心を持ち始めている重要なテーマと考えており、北欧現象学会の会長を務めていたこともあり、北欧現象学者たちとのネットワークももっており、今回の共同研究においては、アドバイザーの役を務める。子育ての現象学という本研究の課題が、どんな広がりを持ち、どんな問題と関連しているかという全体像をもっており、その広い視野からさまざまなアドバイスを提供されることが期待される。

以上3人とも、主にフィンランドのヘルシンキとユヴェスキュラとを行き来しながら活動をしているので、本研究での調査活動もこの二つの都市を中心にして行う予定である。そのため、ヘルシンキ大学またはユヴェスキュラ大学のポストドクの研究員を非常勤の助手として雇い、訪問先施設の情報収集、日本側とフィンランド側、および訪問先の施設との間の連絡・調整を依頼する。

8. 本国際共同研究の実施に向けた海外共同研究者との準備状況

筆者は、Sara Heinämaa とは、北欧現象学会 (2009, Tampere in Finland) で研究発表・意見交換をして以来の交流があり、応募者が開催した Finnish-Japanese Research Collaboration: International Symposium "Phenomenology of Vulnerability and Limits" (2016, Osaka University) では、彼女と共に海外共同研究者を招へいし、そのなかに Irina Poleshchuk と Erika Ruonakoski もいた。それ以来、前述 (1の(1)) の共同研究 (2016年度~2018年度) でも、この二人は研究協力者として北欧現象学会 (2017, Trondheim in Norway) や世界哲学会議 (2018, Beijing, China) でも、日本側の共同研究者とともにラウンドテーブルを開催した。また、Irina Poleshchuk の紹介により、ミンスク (ベラルーシ) やヴェルニス (リトアニア) での講演 (2018年12月) が実現し、そうした様々な機会における意見交換・学術交流のなかで、共有できるテーマとして「子育ての現象学」という構想が浮かんだ。共同研究者の小手川が、Irina

Poleshchuk が議長を務める The Center for Practical Phenomenology の開催した学会（ヘルシンキ、2019年4月）で研究発表を行い、この構想について意見交換し具体化するができた。

9. 海外共同研究者のこれまでの研究活動や主な研究業績

Irina Poleshchuk は、レヴィナス研究から出発し、傷つきやすさ、特に間主観的な時間性におけるトラウマ、母子関係における感受性、フェミニスト現象学などに携わってきた。近年は、現象学と医療人間学の結びつきにも関心を寄せ、慢性疼痛とその親子関係への影響、痛みの個人化と社会存在論にも取り組み、そうした背景から、本研究で「子育ての現象学」の共同研究に関わる計画である。主な関連業績は次の通り。

“Formation of Sensibility in Mother-Child Relation: Temporal Dephasing and Traumatic Displacement”, *Journal of Clinical Philosophy* 19, Osaka 2018, p.64-78

“Transcendence and Sensibility: Affection, Sensation and Non-Intentional Consciousness”, in *Levinas Studies*, Vol. XI, eds. Richard A. Cohen and Jolanta Saldukaiyte, Pittsburgh: Duquesne University Press, 2017, p. 1-20

Erika Ruonakoski は、メルロ＝ポンティの身体の現象学から出発し、近年は、失望を社会的・政治的・間主観的な問題であるとともに将来の方向付けにおける危機として捉える「失望と時間」という研究に携わり、特に、人間関係の壊れやすさに関心を寄せ、トラウマ的状況における身体性を分析している。また、人間と動物の間の感情移入の問題にも取り組み、フェミニスト現象学への関心から、ボーヴォワール研究・翻訳（『第二の性』『両義性の倫理』）にも携わってきた。そうした背景から、「子育ての現象学」の共同研究に関わる計画である。主な関連業績は次の通り。

2017: “Retranslating The Second Sex into Finnish: Choices, Practices, and Ideas”, in *On ne nait pas femme : on le devient: The Life of a Sentence*, eds Bonnie Mann and Martina Ferrari, 331–354. New York: Oxford University Press.

"Familiarity and foreignness of animals: A reinterpretation of the phenomenological theory of empathy and its application to our experience of non-human animals", *Doctoral dissertation*, 2011, Helsinki University.

Sara Heinämaa は、性／ジェンダー、妊娠と出産、老いと死など、応募者と多くの関心を共有し、共同研究を行ってきているが、近年主に携わっているのは、「境界化と経験：正常と異常の現象学的分析」というプロジェクトで、正常と異常の現象学的解明を提供することと、ノーマライゼーションと社会的境界化の理論についての新しい方法論を探っている。このプロジェクトの成果は、健康／病気、健康／障がい、成熟／老いといったケースにおける境界化の過程の理解をも促進させることが期待される。主な関連業績は次の通り。

“'An equivocal couple overwhelmed with life': A Phenomenological analysis of pregnancy”, *philoSOPHIA*, vol. 4, no. 1, 2014, pp.12–49.

“Phenomenological perspectives on human mortality,” Sara Heinämaa, Sami Pihlström and Outi Hakola (eds.): *Human Mortality, Helsinki: GOLLeGIUM: Studies Across Disciplines in the Humanities and Social Sciences, Helsinki Collegium for Advanced Studies*, 2014.

“Aging and death: Perspectives in the future”, in Silvia Stoller (ed.): *Simone de Beauvoir's Philosophy of Old Age*, Würzburg: Walter de Gruyter, March 2014, pp.167–187.

10. 応募者の研究遂行能力及び研究環境

筆者は、フッサール間主観性の現象学に基づいて人間の傷つきやすさと有限性の問題を考察し、その成果の一部を、著書『可能性としてのフッサール現象学—他者とともに生きるために—』（晃洋書房、2018）、編著書『北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす』（大阪大学出版会、2018）、著書『ケアの臨床哲学への道—生老病死とともに生きる—』（晃洋書房、2019）に盛り込むことができた。これまでの共同研究では、個別テーマとして老いと死の問題に取り組みながら研究全体の統括をしてきたが、今回申請する共同研究においても、研究全体の統括とともに海外共同研究者との連絡・調整をまとめていく計画である。「子育ての現象学」については、かつての口頭発表「対話の現象学への一つのアプローチ」（2001年）や「人間の成熟をめぐる」（2010年）（ともに前掲書に所収）で、子育てにおける母性原理と父性原理の対話という問題を考察するなかで触れたことがあり、老いや死の問題を考察してきたことを踏まえて、子育てにおける祖父母の役割や子育てと親の介護の両立といった問題を考察する準備がある。また、北欧を中心とした科研費の共同研究に基づく北欧での調査研究や北欧現象学者との繋がりには10年来のもので、北欧現象学会でも二度（フィンランド・タンペレとノルウェー・トロンヘイム）で発表したことがあり、ヘルシンキでの滞在も数回あり、現地での調査・研究には慣れている。2018年3月に定年退職を迎えたが、その後海外での四つの招待講演もこなしてきており、招へい教員として大阪大学の研究環境（研究施設・設備・研究資料等を含む）をこれまで通り継続して使うことができる。

池田は、障がい（disability）や老いの現象学的研究を進め、自立と依存の哲学的考察を深めるとともに（「自立と依存—哲学的考察の行方—」、『いま、哲学が始まる—明大文学部からの挑戦』明治大学出版会、2018年）、老いと死についての探究も行ってきた（“Security, Peace, and Freedom: Beauvoir and Heidegger on Aging and Death,” *Meiji Journal of Philosophy* vol.1, 2019）。また、障がいや高齢の経験を主題にするなかで、私たちが他者を知覚したり知ったりすること自体に含まれる偏見やステレオタイプの問題にぶつかり、それを考察する発表を行ってきた（“Phenomenological Perspective on Implicit Bias,” *The Nordic Society for Phenomenology*, 2018；「差別的偏見：現象学的倫理学のアプローチ」日本倫理学会、2018）。また、2017年11月から2018年3月までデンマーク・コペンハーゲン大学に研究滞在し、その直後、2018年4月19日には日本現象学会からの派遣により「北欧現象学会（The Nordic Society for Phenomenology）」で講演を行うなどするなかで、北欧の現象学研究者との交流を深めてきた。在職中の明治大学には、現象学関連文献が充実した図書館があり、研究室も常時利用できる。

中は、2012年の研究発表（哲学会大会シンポジウム提題、「生殖と他なるもの」、2012年、同題で『神戸大学紀要』40号、2014年に収録）以来、避妊、中絶を含む、妊娠出産から育児を含んだ広義の「生殖」を大きな研究テーマとして掲げて研究を展開してきた。最近では、子育てと性差の問題を考察して発表するとともに（「母であること」（motherhood）を再考する—産むことからの分離と「母」の拡大）、『思想』、2019年5月号、140—159頁、岩波書店、2019年、「産む性」をめぐる—生殖と「母性」再考）、『フランス哲学・思想』、34号、11—24頁、2018年、“Reinterpretation of Motherhood: Separating it from Giving Birth”, in *Oxford*

Uehiro Centre Work in Progress Seminar, 2018)、新生児遺棄の問題や、その対処の一つである新生児養子縁組の問題を考察しており (“‘Baby-Hatches’ in Japan and Abroad: An Alternative to Harming Babies,” in *The European Conference on Ethics, Religion & Philosophy 2018: Official Conference Proceedings*), 本研究計画を本格的に展開する準備は万端に整っている。また、勤務する神戸大学には、所属する文学部の図書館だけでなく、本研究に深く関連する国際人間科学部(旧教育、発達科学部)や医学部の図書館も利用することができ、豊富な研究文献を活用することができる。

小手川は、フランスの現象学者エマニュエル・レヴィナスの親子論・生殖論についての研究を進め、その成果を含んだ『甦るレヴィナス—『全体性と無限』読解』(水声社)を2015年に公刊した。その後、男性的な身体と出産・養育に関する研究を進め、「男性」や「父」というアイデンティティの脆弱性という問題を浮き彫りにしてきた(「女性的な」身体性と「男性的な」身体性—メルロ=ポンティとレヴィナスからフェミニスト現象学を再考する)、『メルロ=ポンティ研究』、2016年;「子をもつことと親になること」、『倫理学論究』、2017年;「男らしさ」(masculinities)の現象学試論—「男らしさ」の現象学はフェミニズムに寄与しうるのか?—、『國學院雑誌』、2018年)。また、2017年には北欧現象学会において、共同研究者のIrina Poleshchukと共同のワークショップで提題し(“To Have a Child and To Become a Parent”, *Nordic Society for Phenomenology*)、2019年4月に共同研究者のIrina PoleshchukとErika Ruonakoskiとが主催する実践的現象学センターで発表を行うなど、彼女たちと緊密な研究ネットワークづくりに励んできた。在職中の國學院大学には、すでに現象学や子育てに関連する文献を多数収集しており、研究室も常時利用できる。

川崎は、博士課程在籍時からフランスの現象学者メルロ=ポンティの倫理学に関する研究を行ってきたのに加えて(「メルロ=ポンティにおける道徳論の試み」、『倫理学研究』48, 2018)、社会的に弱い立場にある者を対象とする医学研究の倫理に関する研究も行っており、両者を統合する試みとして、当事者(研究参加者)の視点から傷つきやすさ概念を考察してきた(“Vulnerability and Effective Freedom,” *Phenomenology in Cross-Cultural Perspective*, 2018; 「医学研究の倫理とレヴィナス—ヴァルネラビリティ概念の起源?」、『レヴィナス研究』1, 近刊)。また、子育てについても現象学及び倫理学の観点から研究してきた(「支配者を降りてケアをする—男性の子育てについて」日本現象学会、2018)。共同研究者のSara HeinämaaとIrina Poleshchukとは2015-2016年にフィンランド及び日本で計5回のシンポジウム及びワークショップでともに登壇し、議論を重ねてきた(e.g. “Phenomenology of Vegetal Corporeality: A Preliminary Sketch,” *Finnish-Japanese Research Collaboration: International Symposium “Phenomenology of Vulnerability and Limits”*)。なお、現在所属する国立循環器病研究センター医学倫理研究部には生命倫理関係の資料・文献が網羅的に集積されており、現象学の文献については近隣の大阪大学図書館を利用できる。

1.1. 人権の保護及び法令等の遵守への対応

本研究は目的及び手段の点で「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」(文部科学省・厚生労働省)の適用される「医学系研究」には該当しないが、ネウボラにおける調査は人を対象とする研究であり、研究対象者に心理的な「侵襲」を与えることや研究対象者の個人情報を得ることも予想されるため、同意の取得や個人情報保護など、必要な事項

に関しては倫理指針を参考として研究対象者への配慮を行う。必要に応じて、調査開始までに研究対象者への倫理的配慮を含めた研究計画について、少なくとも研究代表者の所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得る。

本研究は主にフィンランドにおける調査であるため、フィンランド及び当該地域の研究に関する法令及び指針を調査前に把握し、それらを遵守しつつ調査を行う。ネウボラなどの施設で調査を行う際には、当該施設の長から許可を得た上で、聞き取りに際しては個々の研究対象者に調査の目的、内容、研究であるため直接の利益はないこと、同意しなくても不利益はないこと、匿名化により個人情報保護の上で論文等において発表する可能性があること等、倫理審査委員会で承認された必要事項を書面または口頭で説明した上で同意を受ける。幼児など未成年の対象者及び同意のできない対象者については家族など然るべき人物から代諾を受ける。調査により得られたデータは本研究においてのみ使用し、研究対象者の個人情報は研究代表者または研究分担者がUSBなどの端末を鍵のかかるロッカー等に厳重に保管する。論文等で本研究班のメンバー以外に成果を発表する際は、研究対象者の希望など特別な理由がない限り匿名化して個人を特定できないようにする。